# 暗黒の魔女

kuma383

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
暗黒の魔女

【Ｎコード】
Ｎ４９１５ＢＡ

【作者名】
ｋｕｍａ３８３

【あらすじ】
魔術師オリバーと、その仲間たちがリバー王国で暗黒の魔女に立ち向かう物語です。

むかしむかし、リバー王国という国では悪い大臣が王様を殺し、王女様を塔の中に閉じ込めてしまいました。大臣の悪い政治のせいで、国民は苦しんでいました。

そんなある日、一人の魔術師が二人の弟子を連れてリバー王国にやってきました。彼は大臣の魔の手から何とか逃げ延びた王族の一人に依頼され、大臣を倒すためにやってきたのです。彼は弟子や頼りになる仲間たちとともに大臣に立ち向かいます。

彼らは苦労の末、悪の大臣を倒すことに成功しました。リバー王国には平和がもたらされ、彼らは自分のいるべき場所へと帰ってきました。

その一年半後、リバー王国を突如襲った動死体の大群により、リバー王国は壊滅的な打撃を受けました。彼とその仲間たちは一年半ぶりにリバー王国に集結し、調査を始めます。やがて見え隠れし始める暗黒の魔女の影…。

新しい仲間も加わり始まった新しい冒険、彼らは暗黒の魔女を倒すことができるのでしょうか…。

## ～物語に際して～

「悪の大臣」の続編です。

魔術師オリバー・ローゼンハインとその仲間たちがリバー王国の悪の大臣を倒してから一年半後、突如リバー王国を動死体の大群が襲い、リバー王国は壊滅的な打撃を受けます。リバー王国を救うべく、オリバーたちはリバー王国に集結し、何が起こったかの調査をはじめます。調査を進めるにつれて見え隠れしてきた「暗黒の魔女」の気配…、新しい仲間も加わり、オリバーたちの冒険が再び始まります。

ストーリーは組みあがっているのですが、作者の個人的な都合等もあって投稿が一時滞る可能性もありますが、必ず最後まで執筆を続けるので、どうか長い目で見ていただけるようよろしくお願いします。

どうぞお楽しみに！

## ～暗黒の魔女～　一章・王国の危機　「1．訪問者たち」（前書き）

オリバーと仲間たちがリバー王国の悪の大臣を倒してから一年半が経ちました。リバー王国では王位に就いたヘルガ女王様のお陰で平和な日々がもたらされていました。

オリバーは自分の故郷に戻り、それまでと同じように魔術の研究をしながら二人の弟子とともに暮らしていました。そんなある日、オリバーたちのもとに訪問者が訪れます。物語はそこから始まります。

## ～暗黒の魔女～　一章・王国の危機　「1．訪問者たち」

とある国のとある村、魔術師のオリバー・ローゼンハインは自分の家で夜遅くまで古代の魔術書の翻訳作業をしていました。

（ふう…。相変わらず、地道な作業は骨が折れる…）

オリバーが首を鳴らすと、部屋の扉をたたく音が聞こえました。

「先生、言われたものを手に入れてきました。」

「ん、ハンスか。ご苦労さん。」

弟子のハンスが部屋に入ってきました。彼は怪しげな物がたくさん入った袋をドサリと床に下ろしました。

「こんな生きたトカゲやら、ネズミの尻尾やら、いったい何に使うんですか？」

「以前イザベルからもらった薬の本に呪い薬についての記述を見つけたんだ。機会があったら試そうと思ってな…。」

「イザベルさん…。懐かしいですね。」

ハンスは目を細めました。

「ああ。…ペーターがいなくなって以来、何だか少し寂しくなったなぁ。」

オリバーは寂しそうに笑いました。

「先生が残れって言ったくせに…。それに今は俺の他にも弟子がいるじゃないですか。」

その時、扉をノックして誰かがオリバーの部屋に入ってきました。

「先生…、ハンス…、ご飯の準備…できてる…。」

「おう、ありがとう、ローズ。さて、もう夜も遅くなっちまったし、飯にするとしよう。」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～

オリバーとハンス、ローズは食卓を囲んで談笑しながら遅い夕食を食べていました。すると、扉を叩く音がします。オリバーが首をかしげました。

「おかしいな、今日は特に誰と会う約束もしていないのに。」

「こんな遅い時間に…怪しいですね。俺が出てきます。先生も念のため用心してください。」

「ああ。」

ハンスは静かに槍を構えると、扉の方に向かって歩きました。

「こんな夜中に、誰だ！」

「…その声はハンスだね。」

外から明るいおかしそうな声が聞こえました。ハンスは面喰いました。

「なっ、なぜ俺の名前を知っている！？」

「ハハッ、そんなに動揺するようでは、用心棒の任務は任せられそうにないね。」

ハンスはまごまごしていますが、オリバーはその声に聞き覚えがあったらしく、ガタリと立ち上がりました。

「この声…、もしかして！」

オリバーは急いで扉に向かっていきました。そしてハンスをどかすと、扉を開けました。

「やっぱりお前か！」

オリバーは外にいた人物を見て顔をほころばせました。

「久し振りだね、オリバー。一年半前にリバー王国で別れて以来だね。」

女性の声も聞こえてきます。

「お久しぶりです、オリバーさん！」

「モニカ！元気そうだな！こんなところで立ち話もなんだ、中に入ってくれ。」

「そのつもりで来たからね。フランソワは裏の納屋に繋いでおくよ。」

外に立っていたのは、一年半前、オリバーと一緒にリバー王国の悪い大臣たちを倒した騎士のパトリックと魔術師のモニカでした。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

オリバーは昔の仲間に久し振りに会えてとても嬉しそうです。

「こっちに帰ってきていたのか。」

「いや、私たちがここに帰って来たのもつい二日前だよ。少し遠くまで旅をしていたのだけど、ここへ戻るついでにリバー王国にも寄ったよ。オーベルクで薬屋をやっているイザベルには会えたよ。」

「そうか、みんな元気にしてるのか？」

「みんな元気らしいよ。イザベルの薬屋もオーベルクでは大した評判だね。で、ビアンカがそこに居候しているんだ。」

「ビアンカか。懐かしいな。」

「ローズのライバルだね。」

ハンスが言うと、ローズはほんの少しだけ口の端を上げました。

「私たちが行った時にはビアンカはまたフラフラと気まぐれの旅に出ていていなかったんだけど、他のみんなの様子も聞けたよ。

…ペーターはマティアスの元で衛兵として張り切っているらしいよ。

ラルフはトリポートに戻って大工を続けているらしい。

北の樹海に帰ったアリスとエミリーはあの狩人小屋を拠点に樹海を見回っていると同時に、あの辺りの村の子どもたちの面倒を見てやったりしているらしいね。」

「懐かしい名前ばかりだな。」

オリバーは昔を思い出すように目を閉じました。

「レオンは改めてリバー王国から分離したシーガルン王国で、兵士たちのための訓練場を再開したようだよ。マチルドも何だかんだでレオンの訓練場にいるらしいんだけど、やっぱり口論ばかりしているらしいね。」

「相変わらずだな、あの二人は。」

オリバーは笑いました。

「唯一、ローレンツのことはわからないけどね。途中までは一緒に旅をしていたんだけど、東方世界に一人で向かって行ったよ。」

「ローレンツならきっと元気でやってるさ。街の様子はどうだった？」

「ヘルガ女王様が統治されて以来、国は活気を取り戻したよ。人々も安心して暮らせているようだね。」

「そうか、それはよかったな…。俺たちの行動の甲斐があったってもんだ。」

オリバーはとても嬉しそうです。パトリックも感慨深げです。

「もう一年半も前の話か…。でも昨日のように思い出されるよ。ハンスもローズも、あの時のまだ幼かった様子がまるでないね。」

「モニカもしっかりとお前を助けてくれているようだな。」

「旅の伴としては最高のパートナーだよ。何度も魔術で助けてもらったからね。」

「暴発しちゃうこともありましたけどね…。」

モニカが恥ずかしそうに言いました。

「はは、そこは相変わらずなんだな。モニカらしくていいよ。」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

いつしか、話は一年半前のリバー王国での戦いの話になっていました。

「あの一件でハンスもローズもよく成長してくれた。本当はハンスをレオンの元で修行させようとも思ったんだが、レオンは俺には力不足だ、って固辞してな。」

「ええっ！？その話、初耳ですよ！？」

ハンスはびっくりしました。

「ペーターをマティアスに頼んだのも本人にはその時までいっさい言っていなかったしな。とにかくハンスは、最近は少し手強い魔獣の討伐も一人で任せられるようになった。」

パトリックは目を丸くしました。

「それはすごいね。ローズの魔術の方はどうなんだい？」

「まだ戦いで通用するレベルではないが、ものすごい勢いで上達し

ている。一年半前はほんの少しだけイザベルに仕込まれただけだったが、今ではイザベルがくれた初歩の魔術の本に書いてある中でも簡単なものは完全に身につけた。

別に、俺やモニカのように生まれつき魔力を備えていなかったとしても、必死に修行さえすれば誰にでも魔術は身に付くが、ローズはもともと潜在能力が高かったらしいからな。

とはいえ、やっぱり魔術の習得には体力が必要だからな、せいぜい週に二回程度しかやらせていないが。空いた日にはハンスと一緒に武器で戦う訓練をさせている。」

「ローズ、相変わらずあのスプーンで訓練してるんですよ。どれだけ先生のことを…痛ッ！」

ハンスがからかうように言うと、ローズがハンスの足を思い切り蹴飛ばしました。パトリックは笑っています。

「ハハハ…。ハンスは魔術の修行はしないのかい？」

「俺は敵に向かって自分で突撃していく方が好きですから。」

ハンスはそう言って自信たっぷりに胸を張りました。

「ハハッ、君らしいな。ローズの方は、昔のモニカのように、魔術が暴発したりはしなかったのかい？」

「最初の頃はひどかったですよ。初めから先生の得意な呪いの魔術を試そうとしてそれが暴発して、俺は全身に痛みを味わうと同時に、三日間も悪夢にうなされました。他にも間違って魔獣を召喚したり、物置を吹っ飛ばしたりしたこともありましたしね。」

「呪いの魔術は難しいもんね…。まずは簡単な炎の魔術から入るべきでしたよ、ローズさん。」

モニカが言うと、ローズは口をとがらせました。

「モニカだって失敗してたくせに…。」

「も、もう大丈夫ですよ！ねっ、パトリックさん！」

「まあ、一緒に旅に出てからは二、三回しかないかな。食料を全部燃やしてしまって三日間飲まず食わずで旅をしたときは死ぬかと思ったけど…。」

「…やっぱり、変わってない…。」

ローズは勝ち誇ったように言いました。

「そんなぁ！だって、少なくとも飲み物は、氷の魔術で作った氷を溶かして何とかなったじゃないですか！」

「お互い、魔術師の弟子には苦労してる、ってことですね。」

「ハハハ、モニカは弟子というわけではないけれどね。」

ハンスの言葉にオリバーとパトリックが大笑いしたので、ローズとモニカは膨れっ面をしました。

「これからどうするつもりなんだ？」

オリバーは改めてパトリックにたずねました。

「しばらくはどこへも行くあてはないから、当分はここにとどまろうと思うよ。もし何か手助けが入り用なときは声をかけてほしい。」

「そうか。それなら気が向いたときでいいからここへ来てハンスの訓練相手をしてやってくれないか？どうも最近、俺では物足りなくなってきたみたいだからな。」

「そうか。私で相手になるかはわからないけれど、ハンスがどれだけ成長したのかも見てみたいしね。」

「モニカも時々ここへきてローズの話し相手になってやってくれ。男ばっかりの環境でつまらないだろうからな。」

「ローズさんはオリバーさんさえいれば…あ、いえ、何でもないです。わかりました。では時々お邪魔させていただきます。」

モニカは視線を感じ、慌てて訂正しました。その時でした。入り口の扉がドンドンという音を立てています。誰かが強く扉を叩いているようです。

「…今度こそ、怪しいんじゃないですか？もう一度行ってきますね。」

ハンスは先ほどのように槍を抱え、扉の前まで行きました。

「誰だ！こんな夜遅くに！」

「頼む！開けてくれ！一大事なんだ！」

外から聞こえてくる切羽詰まった声は、ハンスの耳に覚えがあったようです。

「こ、この声、もしかして！」

ハンスが驚いて扉を開けました。ボロボロの鎧を着た兵士が転がり込んできました。

「ペーター！ペーターじゃないか！」

「ひ、久し振りッス、先輩…。先生も、ローズも、あ、パトリックさんたちも…。」

リバー王国の衛兵隊長、マティアスのところに預けたオリバーの元弟子、ペーターでした。オリバーもびっくりしています。

「ペーター！どうしたんだ！傷ついているじゃないか！ローズ！手当ての準備だ！」

ローズは慌てて頷くと、奥の部屋に入っていきました。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～

ベッドで手当てを受け、ペーターはようやく落ち着きを取り戻したようです。

「懐かしいなぁ、この家。先生によくしごかれていたっけ…。」

「ペーター、一体どうしたんだ？こんなボロボロになって帰ってきて…。」

オリバーは本当に心配そうです。

「そうでした…。実は、リバー王国が侵略されているんです。」

「何だって！？」

ペーターの言葉に、オリバーは驚きました。パトリックも動揺しているようです。

「リバー王国と敵対する国は近隣にはないと思うけれど…。」

「他国に攻められたわけではありません。事の発端はリバー王国の南部、ナンジューマ地方の中心都市であるダナラスフォルスへの侵略です。生き残って逃げてきた兵隊たちによれば、ダナラスフォルスを襲ったのは人間ではなかった、ということでした。」

「人間じゃなかった、だって？」

オリバーは眉をひそめました。何か嫌な予感がしているようです。ペーターはさらに続けます。

「その翌日、キンフィールドの王宮が襲撃されました。押し寄せて来たのは…武器を持った無数の動死体でした。」

「動死体だって！？」

ハンスが思わず大声を上げました。オリバーも唖然としています。

「つまり、魔術師がどこかで動いている…？」

「そういうことかもしれません。とにかく俺はマティアス隊長に言われて、先生に救援を要請に来たんです。衛兵や王国軍だけではこの相手は手に負えない、と…。無我夢中で隊長から借りた馬を走らせ、五日でここへやってきました。この傷は動死体たちの群れを突破する時につけられたものです。」

「私たちが二週間ほど前に行った時には何事も起こっていなかったのに…。」

モニカも信じられないと言った表情をしています。オリバーは意を決したように言いました。

「…わかった、ペーター。すぐにリバー王国に向かって出発しよう。パトリック、モニカ、一緒に来てくれるか？」

「ああ、もちろんだよ。」

「行きましょう。」

二人ははっきりと言いました。

「ハンスとローズも来てくれるな？」

「当たり前でしょう！な、ローズ？」

ローズもコクンと頷きました。

「パトリック、悪いがフランソワに乗って先にリバー王国に行って様子を見てきてくれ。」

「わかったよ。モニカ、行こう。」

「はい！」

パトリックとモニカは外へ出て行きました。そして掛け声と馬の走る音が聞こえました。

「俺たちもすぐに出発しよう。俺たちに馬はないが、急いで行けば、十日でリバー王国のキンフィールドに着ける。」

「ありがとうございます、先生。」

ペーターはオリバーに感謝しました。

「お前は傷が癒えるまでここで休んでいろ。後から追いかけてこい。」

「そんなわけには行きませんよ。一刻も早くマティアス隊長の所へ戻って報告をしないと…。」

「…ちょっと待ってて…。」

ローズがペーターに向かってつぶやきました。

「リカバリー…。」

すると、ペーターの傷口がスッとふさがりました。

「あれ？傷が治った！」

「成功…。」

ローズは嬉しそうです。ハンスは目をまん丸にしています。

「ローズ！いつの間に回復術を身につけたんだ！？」

「まだ途中段階…。一か八か…。」

オリバーは少しだけ顔をしかめましたが、すぐに表情を引き締めました。

「身に付けきっていない魔術をいきなり使うのは感心しないが、とにかくこれですぐにリバー王国へ向かえるな。よし、支度をしよう。」

---

人物紹介

～オリバー・ローゼンハイン～
・「高名な魔術師」
・２６歳。
・一人称は「俺」
・魔術のほか、突剣で戦うこともある。
・このお話の主人公。呪いの魔術の専門家。今までに多くの依頼をこなしてきた。悪の大臣を倒したのもそのうちの一つ。豊富な知識と強いリーダーシップで仲間たちを引っ張る。もともとは「闇の魔

術師」で、その過去は今でも後悔している。その分人の役に立とうと一生懸命。

～ハンス・アルノルト～
・「一番弟子」
・15歳
・槍で戦う。剣も少しだけなら扱える。
・一人称は「俺」
・オリバーの一番弟子。当然オリバーとともに過ごしてきた時間は一番長い。かつて闇の魔術師によって荒廃させられた村からオリバーに引き取られた。最近は戦いの腕前が急上昇中で、オリバー譲りの指揮力も上がってきている。女性メンバーからの信用度も高い。

～ローズ・ミニエー～
・「三番弟子」
・20歳
・短剣で戦う。魔術も扱える。
・一人称は「私」
・オリバーの三番弟子。一年半前のリバー王国での戦いをきっかけにオリバーの弟子になる。もとは貴族の末娘。相変わらず内気で人と話すのが苦手だが、それでも以前よりは口がなめらかになったし、かわいい笑顔もよく見せるようになった。オリバーのことがずっと好きだが、当の本人がまったく気づいてくれないので最近とても焦ってきている。

～ペーター・ヘルマン～
・「衛兵」

・１７歳
・剣で戦う。槍も少しだけなら扱える。
・一人称は「俺」
・オリバーの元・二番弟子。今はリバー王国の衛兵。オリバーの死んだ親友の弟。一年半前のリバー王国での戦いをきっかけに衛兵隊に入る。平和なリバー王国での日々に慣れすぎて腕が落ちてしまっているし、よく油断するようになってしまった。でもいざという時は手がつけられないほどに強くなる。でも女性メンバーからの信用度はまだ低い。

～パトリック・ティボー～
・「鉄血の騎士」
・２６歳
・槍で戦う。馬から降りると剣で戦う。
・一人称は「私」
・オリバーとは古くからの知り合い。高名な騎士、と周囲の人は理解しているが、実際には馬に乗って戦っているだけなので厳密な意味での騎士ではない。しかし、その紳士的な立ち振る舞いや人との接し方は、並の騎士よりもずっと騎士らしい。普段は愛馬フランソワに乗ってあちこちを旅し、見聞を深めている。仲間に、特に女性に対しては紳士的だが、敵に対してはいっさいの容赦がない。

～モニカ・クラウス～
・「暴発魔女」
・１６歳
・魔術で戦う。
・一人称は「私」
・氷の魔術に長けていて、リバー王国の戦い以来パトリックとと

に旅をしている。内に秘められた魔力があまりにも膨大なため、よく魔術を暴発させてしまう。その回数は減ったとはいえ、そこは相変わらず。それでも大好きなパトリックの前では緊張するのか、成功率がグンと上がる。パトリックとともに旅をしてきたおかげで、少々のことではひるまない勇気が身についた。

## ～暗黒の魔女～　一章・王国の危機　「1．訪問者たち」（後書き）

平和な暮らしが続いていたオリバーたちの前に飛び込んできた新たなわざわいのしらせ、それはあまりに突然訪れました。はたしてリバー王国の、そしてオリバーたちの運命は…？

次話ではオリバーたちがリバー王国に到着します。峠を登ったオリバーたちの足元に広がっていたのは、炎に包まれたキンフィールドの街並みでした。そしてオリバーたちの目の前で…。どうぞお楽しみに！

ちなみにローズは何度も回復術を動物で練習してきましたが、ネズミをオオカミに変成させてしまったり、猫の足を三メートルほどの長さにしてしまったりと失敗の連続でした。ハンスに言わせてみれば、ペーターの傷を一度で治せたのは奇跡といっても過言ではなかったのです。

では次話をお楽しみに！

## ～暗黒の魔女～　一章・王国の危機　「2．王国の危機」（前書き）

リバー王国からの救援要請のためにやってきたペーターの話を聞いて、オリバーたちは一路リバー王国を目指しました。大急ぎで旅を続け、オリバーたちは王宮のあるキンフィールドのすぐ近くまでやってきました。

## ～暗黒の魔女～　一章・王国の危機　「2．王国の危機」

オリバーたちは五日間歩き続けました。そしてリバー王国の首都、キンフィールドの手前の峠に来ました。辺りはすっかりと暗くなってしまっています。

「オーベルクにも人影はほとんどなかった…。イザベルの薬屋にも人の気配がなかったしな。」

オリバーが心配そうに言いました。

「どこか安全な場所へ避難したんじゃないですか？」

ハンスが言いましたが、ペーターは悲観的です。

「この状況で安全な場所なんて…そうそうないッスよ…。それに、パトリックさんたちが戻ってきませんね。」

オリバーも不安げな顔をしました。

「ああ…。俺もそれを心配してるんだ。俺の『家』からここへ来るにはこの道が一番近いはずだ。情報を伝えるために戻ってきてくれ

るはずだったんだがな…。」

その時、ローズがピクッと身体を震わせました。

「ローズ？どうした？」

ローズは少しおびえたように言いました。

「峠の向こう側…明るい…赤い…。」

ローズの言ったとおり、頂上の向こう側の空がどこか赤く見えます。

「本当だ…。」

「…最悪の事態が起こっているのかもしれない。急ぐぞ！」

四人は大急ぎで峠を上ってゆきました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

頂上に着いた時、オリバーたちは言葉を失いました。

「そんな…。」

眼下に見えるキンフィールドの街は、真っ赤な炎に包まれていました。その火の手は王宮にも伸びていました。ペーターは気が気ではありません。

「急ぎましょう、先生！マティアス隊長たちのことが心配です！」

「あ、ああ！」

彼らは大急ぎで峠を下ってゆきました。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～

街は逃げ惑う人々で大混乱していました。

「水をかけても火が消えないぞーっ！」

「早く！早く逃げろ！」

（水をかけても消えない炎…魔術に違いない）

オリバーがそう思った瞬間、ペーターの力のない声が聞こえました。

「ああっ！お、王宮が…。」

ついに丘の上に立つ王宮も真っ赤な炎に包まれました。そこへ、一人の兵士が走ってきました。

「ペーターさん！」

「あれは、衛兵隊の兵士だ！おいっ！王宮はどうなっているんだ！」

「手遅れ…でした…。ヘルガ女王陛下はじめ、多くの方々が火にまかれ…。私はペーターさんにこのことを伝えるようマティアス隊長に言われて…。」

ペーターはその場に座り込んでしまいました。そして次の瞬間、剣で自分の首を切ろうとしました。

「エクスクルージョン！」

オリバーはとっさに叫びました。ペーターの剣が遠くまで飛ばされました。ハンスはびっくりしています。

「ペーター！何でこんなことを！」

「俺のせいで隊長たちが…。だったら俺も…。」

オリバーが厳しい顔で言いました。

「いいか、ペーター。よく覚えておけ。お前はマティアスの部下であると同時に、俺の弟子だ。お前がどこで死のうと勝手だが、俺の前で死ぬことだけは絶対に許さないからな。」

「うわっ！危ない！」

ハンスの叫び声にオリバーがとっさに振り返ると、先ほどペーターに報告をした兵士が剣を振りかざして襲ってきているのです。オリバーはペーターを突き飛ばし、指先を兵士に向けました。しかしその時、ヒュン！という音がしました。そして兵士は地面に倒れこみ

ました。

少し離れたところに、見慣れた影がありました。

「…間に合ったようですね。」

「アリス！エミリー！」

一年半前にオリバーたちと一緒に戦った狩人姉妹、アリスとエミリーが愛馬、カトリーヌとアンヌを走らせて近づいてきました。アリスはペーターに言いました。

「死に急ぐこともないだろう、ペーター。ヘルガ女王様は生きておられる。今はパカロンに避難されておいでだ。」

「隊長は！？マティアス隊長は！？」

ペーターの悲痛な問いに、アリスは悲しそうな顔をしました。

「…残念だが、マティアスは死んだそうだ。女王様を逃がすため、動死体の大群の中にわずかに生き残った衛兵とともに残ったそうだ。衛兵隊も貴様を除いて全滅だ。」

「じゃあ、この兵士は…。」

ハンスが倒れている兵士を見て青ざめた顔をしました。オリバーが淡々と言います。

「…洗脳されている。以前ローズがプレグーにやられたのと同じ状況だな。」

「とにかく、これから私たちの『隠れ家』に案内します。さあ、乗ってください。私たちはオリバーさんたちを迎えに来ました。」

エミリーが言いました。

「…ありがとう…。」

ペーターは悔しさを噛みしめています。オリバーは厳しい顔をしています。

「あのマティアスが死んだなんて…信じられないな。状況を詳しく教えてくれないか？」

「吾れも細かいことはわからぬのだが、ともかくわかる範囲で教えるとしよう。さあ、カトリーヌに乗るのだ。」

「ありがとう。」

オリバーはアリスに言われた通り、カトリーヌに乗りました。

「ローズはエミリーのアンヌに乗せてもらえよ。俺はペーターの馬に乗るから。」

ハンスの言葉にローズはコクンと頷き、エミリーの愛馬、アンヌに乗りました。ハンスもすぐにペーターの馬に乗りました。

「よし、準備はいいな。行くぞ。ハアーッ！」

三頭の馬はオリバーたちがもと来た道を引き返してゆきました。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～

アリスがオリバーに状況を説明しました。

「ヘルガ女王様、それにオットー様はパカロンのオットー様の城におられる。動死体の大軍団はダナラスフォルスとキンフィールドを襲った後、西の方へ侵攻していったようなのだ。」

「西の方…シーガルンか。」

「うむ、その可能性が高い。ともかく『隠れ家』に来るのだ。皆お前たちを待っている。」

「わかった。…そうだ、パトリックとモニカを知らないか？向こうを出るとき、先に馬でここに来させたんだが…。」

「うむ、二人とも本拠地で待っている。…パトリックは満身創痍といった感じなのだが…。」

「な、何だって！？」

オリバーは思わず声を大きくしました。

「女王様たちを逃がす際、衛兵隊と一緒に動死体の軍団と戦ったそうなのだが…ヴォルフとモニカに運ばれてきた時には生きているの

が不思議というほどに傷ついていたのだ…。」

「そんな…。」

「マティアス隊長が戦死してあのパトリックさんも瀕死の重傷、信じられませんね…。」

オリバーもハンスも茫然としました。

「しかし…、こんな形とはいえまたお前に逢えたことは嬉しいな。」

アリスが少し感慨深げに言いました。

「はは、そうかい？俺も嬉しいかな。」

「何！？本当か！？お前にそう言ってもらえるとは…。」

ローズが思わずエミリーの体をギュッとつかみました。エミリーは苦笑いしてローズに声をかけようとしましたが、あるものを見つけて叫びました。

「オリバーさん！あれを！」

「どうした？…ああっ！」

エミリーが指差した方向を見て、オリバーは愕然としました。一年半前にギル大臣を閉じ込めた塔の牢獄が炎の中でガラガラと崩れていっているのです。

「あの中にギル大臣がいるはずだ…。果たして巻き込まれて死んだか、それとも上手く逃げ延びて生きているのか…。もし生きているとしたら、かなり厄介なことになるぞ。少なくとも今回のことはギル大臣が計画したことだと考えてもいいだろう。」

「先生、様子を見に行きませんか？」

ハンスが心配そうに言いました。

「いや…。まだ俺たちも体勢を整えていない。うかつに動くのは危険だろう。まずはエミリーたちの言う『隠れ家』に行ってからだな。」

---

人物紹介

〜アリス・クラメール〜
・「樹海の狩人・姉」
・２６歳
・弓矢で戦う。短剣も少しだけ扱えるようになる。
・一人称は「吾れ」
・ノーザリン地方の樹海の狩人。エミリーの姉。とても凛々しい女性。尊大な話し方は相変わらず。普段は樹海で狩りをすると同時に、樹海の近くの孤児たちの世話をしている。愛馬の名前は「カトリーヌ」。オリバーと久しぶりに再会できたせいか、以前のようにオリバーに対する好意を隠すようなことは減った。意外と精神面がもろい面も妹離れできていない面も相変わらず。

〜エミリー・クラメール〜
・「樹海の狩人・妹」
・１９歳
・弓矢で戦う。短剣も少しだけ扱えるようになる。
・一人称は「わたくし」
・ノーザリン地方の樹海の狩人。アリスの妹。大人しく礼儀正しい女性。動物たちの世話をするのが得意だし、好き。アリスとともに孤児たちの世話もしている。愛馬の名前は「アンヌ」。少し過保護気味な姉に少し困っている。街の中を歩くことにはかなり慣れてきたけれど、それでもまだよく迷子になる。少しだけ年下には厳しい面も。

## ～暗黒の魔女～　一章・王国の危機　「2．王国の危機」（後書き）

オリバーたちが到着すると同時に、キンフィールド城は焼け落ちてしまいました。しかし何とかアリスたちの到着が間に合ったおかげで女王様たちの安否の確認はできました。はたして今回の件の首謀者はギル大臣なのか、それとも…。

次話ではオリバーたちが『隠れ家』に到着します。そこではかつて苦楽を共にした懐かしい仲間たちが待ち構えています。そして、ペーターがオリバーにある依頼をするようですが…どうぞお楽しみに！

ちなみにこのキンフィールドの大炎上で、キンフィールドの住民の３割が命を落としました。あとでこの事実を知ったオリバーたちは激怒したようです。

では次話をお楽しみに！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4915ba/

---

暗黒の魔女

2012年1月14日12時59分発行